Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-18

座談会 長谷川先生を語る（長谷川善計教授退官記念号）

北原, 淳(司会) ; 池田, 元継 ; 今村, 隆 ; 岩谷, 親憲 ; 奥村, 義雄 ; 大野, 道邦 ; 藤田, 佳代 ; 西川, 美紀 ; 高井, 康弘 ; 茶円, 順子 ; 竹内, 隆·

(Citation)
社会学雑誌,11:63-87

(Issue Date)
1994-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010832

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010832

座談会

長谷川先生を語る

司会　北原　淳
神戸大学教授

出席者

池田　元継（7回）
東芝機械マシンツールエンジニアリング

今村　隆（7回）
NHKきんきメディアプラン

岩谷　親憲（7回）
松蔭女子学院教諭

奥村　義雄（11回）
富山大学教授

大野　道邦（13回）
神戸大学教授

藤田　佳代（13回）
藤田佳代舞踊研究所主宰

西川　美紀（23回）
地域と社会研究所主宰

高井　康弘（28回）
大谷大学講師

茶円　順子（33回）
池田北高校教諭

竹内　隆夫（修5回）
立命館大学教授

野﨑　敏郎（修18回）
福岡教育大学講師

蔡　漢（修20回）
株式会社富士経済

趙　蘇恩（修22回）
主婦

1993. 9. 5

神戸市勤労会館にて

はじめに

司会　それではこれから座談会を始めさせていただきます。今日はお暑いなか、またお忙しいなかを、お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。今日の座談会は、平成六年三月をもってご退官になる長谷川先生を縦横に語ろうという趣旨で開くことにいたしました。私は司会を務めさせていただきます北原です。

では最初に私のほうから長谷川先生の研究、教育、学内行政等について簡単に紹介させていただきます。先生は、昭和五年（一九三〇）に神戸市にお生まれになりました。神戸大学を卒業されたのち、早稲田大学大学院を経て、昭和三一年（一九五六）に神戸大学へ助手として赴任されました。今年で神戸大学勤続三八年目となられます。まず一〇年間助手を務められ、昭和四一年（一九六六）講師に、昭和四四年（一九六九）助教授に、昭和五四年（一九七九）教授になられました。非常に長い間、神戸大学に勤続され、学内の諸行政にもたずさわってこられました。昭和五九年（一九八四）に評議員を、昭和六一年（一九八六）から二年間学生部長を、さらに平成三年（一九九一）から二年間文学部長を務められました。学生部長のときは、分離分割の入試改革が始まった年で、たいへんなお仕事であったと思います。ご本人は、これで行政の大役はお役御免、と思われたようですが、望まれて学部長になられると今度は全学の再編成期でして、教養部が国際文化学部、教育学部が発達科学部というふうに名称が変更されて再編成され、教員が相互にかなり異動し、文学部の教員も五〇名以上になりました。全学的に激動した時期の学生部長、文学部長でさぞかしたいへんなお仕事であったかと思います。学問はもちろんですが、学内行政についても決して手抜きはされず、徹底的に全身で当たられたので無理がたたり、文学部長をやめられる頃には入院までされました。いまは全快されましたが。

司会・北原

次に、長谷川先生の研究業績についてご紹介いたします。ほぼ五つの分野に分かれると思います。第一に、一九五七年から七二、三年くらいまで一連の理論社会学・学説史、とくにアメリカのパーソンズ、ウォーナー、それからデューイの研究があります。第二に、一九六〇年代には産業社会学の分野で、理論的研究とともに活発な調査をなさっておられます。鉄鋼、ケミカルシューズ、酒造業など幅広い

業種の工場調査、労働調査をなさっておられます。第三の分野は、一九七四年の論文あたりから、家と同族の実証的な研究を始められまして、これが先生にとってアメリカ理論社会学に次ぐもう一つのライフワークとなりました。第四番目の分野としては、杉之原壽一先生がずっとやっておられる部落問題の研究です。それを始められたのは、杉之原先生が文学部長をやっておられた一九八〇年前後で、杉之原先生を手伝うかたちで始められ、五、六年間にわたって部落問題に関する業績を残されました。第五に、八〇年代の後半からは中国にも関心を寄せられ、講義や調査で何回か中国に行かれて、論文もいくつか書いておられます。だいたい業績としては、以上の五つの分野があるのではないかと思いますが、さきほど申しましたように、とくに力をいれておられたのは、アメリカ社会学と家・同族の研究の分野だと思います。

私が二〇年ほど前に長谷川先生を存じあげたころは、すでに長野県の佐久市で、今日もみえておられる立命館大学の竹内先生（当時修士の学生だったのですが）を指導して、同族の調査をしておられました。一八年前に私が神戸大へ赴任したころは、ほとんど家や同族の話でもちきりだったように思います。その家と同族の研究は、亡くなられた社会学者の故島崎稔先生がいみじくもおっしゃってましたが、理論社会学者らしくきわめて理論的です。あまり単純化すると「私はそんなことは言ってません」としかられそうですが、家と家から構成される同族は一種の公的単位であり、近世幕藩体制の農村支配のための行政的単位として機能した、という画期的な「長谷川理論」をうちたてられました。そういうオリジナリティーのある理論をうちだされるまでの十数年間の理論的彫琢と、それを裏づけるための農村調査や史料あさりの繰り返しとは、執念の鬼というくらいに徹底的のうえに徹底的であり、私はそばで拝見していて、学問の厳しさというものを無言で教えられた気がしました。

さて、先生のお人柄などにつきましては、卒業生のみなさんのほうが詳しいと思いますので、みなさんのお話をうかがっていこうと思います。

一　助手時代の先生――面倒見のよい先輩、友達

池田　いま考えてみますと、われわれがシニアに上がった三一年に先生は母校の神戸大学へ戻られたわけですが、すでにずうっと以前から助手をしておられたような感じでした。私どもは先生の授業は一度も受けなかったわけですが、

池田

社会学のわからないことなど、つねになんでも相談にのってくださいました。教授、助教授の先生方が堀先生、金澤先生、杉之原先生と、とにかく確固たる存在でしたから、われわれとはずいぶん距離があったわけですが、非常に距離のないところに長谷川先生がいらしてくださって、あぁこんなにいいところか、と思った記憶があります。

今村

今村　いまも池田くんが話しましたように、先生が助手になられて半年目に、僕らがシニアに上がりました。あの当時は、非常にアカデミックな堀先生が主任教授でしたが、とにかくわれわれがあまりにも勉強しないんで、時々授業中にヒステリーをおこされるぐらいでした。われわれ七回生の時代は、新制大学になったばかりで、文学部といっても場所は御影（現在の御影工業高校の校舎）であり、どうもまだ大学としての雰囲気がしっくりいってなかったのです。われわれもどさくさにまぎれて大学に入ったような感じでしたんで、堀先生をはじめ、たいへんいらだっておられたんじゃないかなぁ。そういうときに長谷川先生が、僕の高校の先輩でもあるんですけど、非常に若々しい感じで、僕らと対等につきあってくださいました。大教授の先生方と僕らとの、教育に対する心がまえの差が大きいなかで、その間に入って、先輩であり、友達であり、しかも、学問に対する厳しさも教えてくれました。当時も学問には非常に厳しくて、それはついに変わることなく、今も非常に熱気をもって、しかも厳しく向かわれている。

去年から今年にかけ、政治では五五年体制の終焉でしたが、あの当時はその五五年体制の始まりで、先生は社会党に非常に期待をかけておられ、ときどき酒を飲んだときなどに、「もうすぐ社会党の天下がくる」と言われたものです。先生は社会に対しても理想を追い求めておられたように思います。しかし、家に遊びに行って、先生の同級生も来られて一緒にお酒を飲んだりしたときは、長谷川先生に対しては何を言っても怒られない、という雰囲気でした。情の厚いところはこの三十数年間全然変わっていない。昨年、縁があって半年間、文学部で新聞学の講義をさせてもらったんですけど、その間に先生は病気をされ、入院なさって、いつも若い感じの先生が、さすがに少しやつれておられて、少し疲れがでてきたのかなあと思いました。あれだけ厳しく道を歩んで来られたのだから、さもありなんです。僕らぐらいに、六割五分くらいの力で仕事をするのが、

ちょうどいいんじゃないかな。

岩谷

岩谷　われわれがシニアに上がったとき、先生はまさに助手になりたてのころだったので、講義は直接受けていません。ですが、堀先生の講義に一緒に出たあと、わからないことを聞いたりしました。とくに印象に残っているのは、松下電器の労働組合から頼まれた調査のときに、ご一緒したことですね。あの当時は、今と違って手作業でしたが、綿密な集計の仕方を教わりました。さきほど、今村くんも言いましたが、私も家が近かったので、大学の研究室よりもお宅によく遊びに行きました。われわれが学生のときは厳しい反面、面倒見のいい兄貴的な存在でした。

大学が単なる研究機関ではなくて、教育機関だということをよく承知しておられて、学生を育てることに非常に熱意をもっておられたと感心しています。卒業後もお宅に伺うたびに、なみいる帝大に対して、新制というハンディキャップのなかで、神戸大学がいかにして教え子を研究者に育てるか、ということに腐心なさっているようでした。

一〇年前にお宅に伺ったときは、『社会学雑誌』を創刊するときでしたが、表紙の色を決めるのにサンプルをたくさんもってこられ、色々な角度から検討されておられました。結局、創刊号には六甲山の松色を使うことになったのですが、あの緻密な検討には驚きました。また、家と同族の調査で長野県へ行かれ、たまたまいい資料が見つかった直後にお宅にお邪魔したときには、非常に長時間そのいきさつをお話しされました。こういう学問に対する情熱には、非常に感化を受けたと思っております。

奥村

奥村　私たち一一回生が専門課程に上がったのは一九六〇年で、例の安保闘争の年でした。安保闘争だけでなく、その後もいろいろあって、専門課程にいる間もなんだかんだと問題があった時期です。長谷川先生が助手になられて数年たったころですね。あのころのことでは、社会学専攻生の研究会や読書会などが忘れ難いことの一つです。たしか、階級論について研究会をやったのですが、難しかったけれども結構楽しかった思い出があります。長谷川先生からは直接講義は受けませんでしたが、学生が研究会や読書会を開いたりすると、非常に熱心に指導や助言をしていただきました。もう一つは、専門課程に上がった翌年、関西の社会学専攻コースのある大学で、「関西学生社会学セミナー」を始めたことが記憶にあります。

そのときのテーマは疎外論だったと思います。長谷川先生には産業・労働の分科会でチューターをしていただきました。最初、他大学にも働きかけてセミナーを実施する力量には多少の不安もあったんですが、長谷川先生には「力量があるかないかなんて言ってたら、いつまでたっても何もできない。そういうことをやりながら力をつけていきなさいよ」と励まされました。それでセミナーを開いたり、機関誌を発行したりできたのだと思います。

それから当時は、しょっちゅういろんなコンパがあったんですね。神戸港へ行ったり、六甲山に登ったりもしました。何かあるとたいてい長谷川先生にもきてもらっていました。帰りに、三宮あたりで喫茶店に入ると、学生がウイスキーを飲んでいても、長谷川先生は紅茶を飲んでおられました。でも、遅くまでつきあってくださいました。そういう点では、研究者としてはもちろんですが、教育者としての先生には非常に大きな影響を受けたと思います。私はいまだに、階級とか、疎外とか、広い意味での産業社会学をやっているのですが、考えてみると、これはそのころの先生との出会いから始まっているような気がします。

藤田　当時、先生は助手で、私たちみんなお友達みたいな感じでしてね。ただ、私が四回生の時のことですが、舞台

藤田

がたいへん忙しくて、卒論が書けなかったんです。そしたら、教授の先生方は「藤田さん、三〇枚でもいいから出しなさい。そしたら、卒業させてあげます」みたいなことをおっしゃるんで、私は「気にくわんな」と思ったんですよ。それで長谷川先生に相談にいったら、「あなた、芸術の道にはいるんでしょ。同じことじゃないですか、一年や二年、なんですか。自分の気にいったものを書きなさい」と、一喝されました。私は学問の道の厳しさはさっぱり知らないのですけれど、「女の子やから卒業しなさい」とは言われなかったですね。結局、卒論は一年遅れて書きました。

二　大学院教育――学問に厳しく人間にやさしい先生

竹内

竹内　大学院のころの授業は、主に演習形式で、杉之原先生とお二人で担当されていました。二人の先生のパーソナリティの違いが出てくる非常に対照的な指導でしたね。杉之原先生はだまって聞いていらっしゃって、長谷川先生は必ずブワーッと反応が返ってくる。杉之

原先生も厳しいことを言ってらっしゃるんだけれども単発的で、その響き方が、受け取るほうからすると、比較的軽く受け取られる。ところが、長谷川先生はすべてを連続してワーッと言われる。受け取る側にとってはものすごくダメージになるんです。ですから発表の度にいつも悩んだという記憶があるんです。そうはいっても、やり込めるだけでなく、後で必ずフォローするという点では、さきほどからお話が出ていますように、教育者としての立場を非常に意識しておられたと思います。

西川

西川　私が卒論を書くとき、ちょうど竹内さんが修論を書かれたんですね。竹内さんの修論を参考にして私は卒業論文で非常に良い点をいただいたんです。長谷川先生がちょうど四二、三才のころ、昭和四九年から五〇年に、ご指導いただいているんです。私は社会調査室へ毎日毎日集計に通い、窓から神戸製鋼の灯が見えるのが楽しみでした。社会調査室からみえる港の風景が私にとっては懐かしいです。長谷川先生は杉之原先生の女房役で、女房役って言い方は「フェミニスト」の私としてはあんまりしたくないんですが、ご多忙の杉之原先生を、影になり日向となって支えてこられたという印象があります。杉之原先生は、どっちかと言いますと学生との接触の少ない先生だったと思います。実は私の指導教授は杉之原先生だったんですけど、長谷川先生にほとんど面倒をみてもらいました。お二人が二人三脚で教室がうまく機能していた時期でした。

杉之原先生は優しくて、長谷川先生は、竹内さんが言われたとおり、ずっとうるさいんです。農村で見ず知らずのところへ面接調査に行かされて、汚い民宿にも泊まらされて、大変なことになったなあ、と思いました。でも今から思えば、先生も初めての経験で、非常に無理をされていたのがわかるんですね。理論派で野外調査などしたことのない先生が一番乗りで調査にでかけられる姿をみて、私達も一生懸命やらないといけないと思いました。自分がいつも第一線にたってやっていくという非常にまじめな研究態度、あるいは教育者としての態度が心に残っています。

ただ、欲を言えば、神戸大学では社会調査の講義でも量的解析や検定など、教えてもらっていないんです。私は福井医科大学に勤めて、公衆衛生学を教えたとき、徹夜して統計学の本を泣きながら読んだんですよ。今、細々と「地域と社会研究所」というのを主催していて、理屈ではなくてまずデータを集め、証拠のあることでものを言え、とい

う私なりの方針があるわけですけれども、そういうこだわりのきっかけをつくっていただいたのは、佐久の農村調査であり、長谷川先生、杉之原先生の実証研究でした。お二人にとくに身近で教育を受けたというのは、私の価値観に大きく影響しています。

若い方はご存じないかも知れませんが、社会学一期生の光吉先生、居安先生、長谷川先生は三羽烏なんですね。そのなかで、長谷川先生は堀先生を継いで、オーソドックスな神戸大学の社会学の道筋をつけられた二代目であり、うるさい先生ですけれど、たいへん尊敬しています。

高井

高井　長谷川先生については印象に残っていることがたくさんあります。一九七七年秋、新歓コンパに出ましたが、そのときは気さくな感じでした。こちらが「アジアのことに関心があります」と口走ったら、それでもう「高井はアジアや」ということになってしまいました。長谷川先生には、学生の関心を引き出し、それを覚えていて色々と考えてくださる面があります。ところが、ちゃんと使い分けがありまして、学部三年四年時のゼミは、一転して非常に厳しいものでした。レジュメを出すと、沈黙の後、一語一語の定義をきかれます。「あんた、この題は何ですか」と、題の検討だけでゼミが終わってしまうこともありました。また、最悪の場合には、途中でレジュメを投げ捨てて、ツカツカと帰られたこともありました。僕らの間では、なんとかレジュメを読み終えてゼミが終われば、ともかく「完投」だけはした、と喜んだものです。そのなかで学問に向かう心がけや生活態度、出典の明示など技術的なことまで訓練して下さいました。今でも、長谷川先生だったらどう言われるかなぁ、と頭の中に「内なる他者」として存在しています。ただ、さきほど竹内先生が言われたように、必ずあとでフォローしてくださるんですね。大学の坂を降りた喫茶店のあたりで「スパゲッティでもどうですか」とくるわけです。

とにかく職業上教育にかかわる者としての責任感を強くお持ちの先生ですね。講義にあたっては、プリントをきっちり作っておられました。僕が講師を始めた最初のころは、長谷川先生のプリントを引き出して見たりしてました。声が大きいというのも皆さんご存じのとおりです。また、チョークをボリボリと折りながらの板書も有名で、なにごとにも「形」で熱意があらわれている感じでした。

僕が学部生だった一九七〇年代末は、ちょうど博士課程ができる前夜でしたから、非常に張り切られていたんじゃ

ないかと思います。大学院に入ってからは、赤穂での社会調査やその後の日本社会学会での共同報告などが印象に残っています。なかでも、八三年に長谷川先生を中心に『社会学雑誌』の具体的な作業が始まってからはたいへんでした。藤井、油井、材木（現在、広島大）の各氏と、社会調査室で夜遅くまで作業した覚えがあります。そのときも先生はレイアウトや校正など全作業にわたって懇切にアドバイスして下さいました。僕は事務的なことはダメだったので、よく怒られましたが、それも感謝すべきことと思っています。

茶円

茶円　私は、八一年に大学に入って、八五年に卒業しました。長谷川先生の五〇代のころにあたると思います。二回生の後期から、たしか「社会学概論」という長谷川先生の講義を受けたと思います。非常に大きな声で、黒板にもたくさん書いてくださって、わかりやすい授業でした。それから、ゼミにいくと、高井さんが言われたように、本当に厳しく指導されまして、友達が泣いたこともありました。泣き声でものをいっても、ダメなものはダメで、容赦なかったですね。こんなものはダメだ、とゼミの途中で席をたっていかれたこともありましたし、「あんた、アホちゃいますか」と何度も言われました。ですから、あとでフォローしてくださったという話は、私にはピンときません。

ただ卒業してからは違います。四回生の時、「高校の教員になるなら、修士課程を出なさい」と言われたんですけど、そのときは早く勤めたいと思って進学しませんでした。ところが最近、今からでもいきたいと思うようになり、つい一カ月前、大学に行ってみましたら、たまたま長谷川先生がいらっしゃったんです。そのときに、今の気持ちを話したら「高校の教師ならこういう問題をとりあげてみてはどうですか」と、問題点から結論まで、ほとんど修士論文の大枠を言ってくださったんです。それから、一緒に事務室に言って、大学院の募集要項もくださいました。そのあと別れ際に、「またなんかあったら、電話してきなさい」と言ってくださいました。本当に最後まで面倒を見てくださると改めて思いました。

野﨑

野﨑　私は出身が信州大学ですから、先生とのおつきあいは大学院からです。神戸大学の修士課程にきたのが一九八五年ですので、先生はもう教授になられ、評議員をやっておられたころです。

長谷川先生は私が就いた先生のなかでもっとも印象に残る方です。概念規定に厳しいことは高井さんも言われたとおりで、ゼミで報告するためだけのレジュメでもけっして生半可なことは許されず、言葉のおそろしさを教えていただきました。ゼミ発表にかなり分厚いレジュメを用意してきても、最初の四行目で粉砕されてその後の部分は読むこともできなかったこともあり、用意したレジュメを最後まで読めるか読めないかの戦いが長くつづきました。

また、留学生の発表にたいしては、レジュメの日本語表現をひとつひとつ直していく懇切きわまりないものです。高井さんからも話が出ましたが、ゼミ発表のフォローは非常に丁寧でした。私が学会発表の元原稿をゼミで発表して、それを直筆で先生に直していただいたあと、もう一度ゼミで発表しました。ところが今度はその直筆の部分にたいして突っこまれるのです。教わったものを自分で消化していないとダメなんです。自分の指導学生にたいして絶対に手をぬかないところは感嘆しました。

われわれ学生には厳しい面ばかりみえるんですが、事務職員の方にたいしては非常になごやかで、けっして威圧的な態度をとられませんでした。比較家族史学会の大会を神戸大学で開催したとき（一九八九）、当時学生掛長だった筒井さんにも力を貸していただきました。長谷川先生は、事務的なことがらについては、筒井さんの意見を尊重しながらことをすすめられたものです。

この大会運営は長谷川先生が全体を取りしきられたのですが、学会の準備はこんな細かいことまでするのかと驚きました。たとえば、灰皿の並べかたから、懇親会に出す酒の銘柄の選定までも徹底的に議論しました。会場の設営にかんしても、先生は朝一番にやってきて、学生といっしょにポスターを張りに出かけ、張る場所や張りかたまで指導なさるのです。そういう実務的なことも非常に厳しく徹底していました。『社会学雑誌』でも、たとえば目次のレイアウトを訂正しなさいとか、中扉の見出しの字の位置を一～二ミリ下げなさいなどと注文をつけられました。

三　気配りのお人柄

趙

趙　私と先生の出会いは一九八八年でした。神戸大学に入りたくて北原先生の研究生になりました。北原先生が忙しいと、長谷川先生がいろいろ面倒を見てくださり、教えてくださいました。研究生の願書が必要だ

ったのですが、日本語ができませんでした。そのとき長谷川先生はその下書きを書いてくださって、あとは清書すればよいだけでした。そのとき、長谷川先生はとても優しい先生だという印象を受けました。

大学では先生の社会学概論の講義を三年くらい受けましたが、一番わかりやすい講義でした。とくに私たち留学生は最初あまり日本語ができず、社会学の専門用語がよくわかりませんでした。はじめは何をおっしゃっているのかわからなくて、授業をテープに録音して家で繰り返し聞いて、三カ月くらいして少しわかるようになりました。先生が一文字一文字手書きされたプリントは今でももっています。夜、先生がプリントを書く姿が見えるようです。本当に感動します。それと、学問に対して厳しいというのは私も感じます。最初のゼミで、当時院生だった高井さんが叱られているのを見て驚きました。こんな先生にあたってどうしようと思いました。でも多分、年の関係だと思いますが、私は優しい言葉で誉められて、何とか修士課程を修了しました。

先生とはいつも友達のように接することができました。先生と一緒に歩いて六甲駅まで降り、駅の裏の喫茶店で、お茶を飲みながらいろいろお話しました。本当に心のやさしい先生です。皆さんには悪いけど、私は日本人は冷たいというイメージがありましたが、先生とお会いして、心からあたたかい人だと思いました。私だけでなく、他の留学生もいろいろお世話になりました。祝さんという留学生の保証人にもなっていただきましたし、彼女が日本に来たときに、住むところがなくて先生のお宅にご厄介になったこともありました。長谷川先生は学問には厳しいけれど、優しい方だと留学生の間でも思われています。長谷川先生のお陰で、私は今でも、神戸大学は日本で一番あたたかいところだと思っています。

蔡

蔡　私は日本に来て間もなく、長谷川先生にお目にかかりました。日本語が未熟で、しかもはじめて外国の先生と接することにたいへん緊張していましたから、先生の親切な話しぶりと朗らかな笑い声は、安堵感と愉快な気持ちを私に与えてくれました。日本に来た当初は言葉の問題のために、授業がわかるかどうか心配でした。しかし先生が面倒を気にせず、重要なポイントを黒板に書いてくださったので理解しやすかったと思います。中国で社会学ができてから日が浅かったので、私の理論の勉強は実は貧弱でした。でも先生の授業の理論の説明が明晰だっ

たので、理論の理解がとてもやりやすかったのです。日本の社会学のレベルと、先生の学問に対する造詣の深さがそこから感じとれました。先生の授業は何度出席しても得るものがあり、興味深く聞かせていただきました。私は卒業するまでできるだけ出席するようにしたものです。

社会学専攻の留学生は当時、最盛期には一〇人ほどいました。韓国、タイ、モンゴル、ペルー、中国から集まってきていて、ゼミはにぎやかでした。みんなの自国のことについてのいろいろなテーマのレポートは、とても興味深かったです。先生は各国のことについて社会学理論で明快に分析し、私たちを啓発してくれました。とくに中国のことについては、先生はわれわれ中国人よりも深く認識されていると思いました。私たち自身が自国のことについて論争するとき、長谷川先生の話が理論上の武器として引用されていました。

また毎年お正月には、先生は異国で生活している留学生に気を使って下さり、みんなを家までよんで招待していただきました。暖炉のある部屋で、着物を着て普段のイメージとはちょっと違う先生をみんなで囲んで、私生活のこと、自国の風俗、日本での生活経験など色々な話をしました。これは留学生たちの心待ちの行事となっていました。われわれの日本での留学生活の中で、長谷川先生はなんと大きな存在だったろうと実感します。退官されても先生には引き続き私たちを叱ってくださり、また教えていただきたいと思っています。

奥村　『社会学雑誌』の第三号で、杉之原先生がご退官のときに、「杉之原先生を語る」という座談会がありましたね。長谷川先生が杉之原先生を評して、寡黙な方だとか、近代人だとか、個人主義の徹底した人だとか、合理的な人だとかといった表現で称えておられました。その点、長谷川先生は寡黙ということではまったく対照的な人で、先程からも出ているように、お若いころから声の大きさも変わっていないように思います。少し前に三宮の喫茶店でお話した時にも、相変わらず声が大きい。たしかに厳しいこともおっしゃいますけれども、明快ですね。また、口では結構厳しくても、後はさっぱりされているので、とにかくすっきりした話ができる、そういう方だと思うんです。もう十何年か前ですが、いちど富山大学で集中講義をお願いしたことがあるんです。そのときに、たしか「無我童子」という銅製の人形の置物をおみやげにいただきました。今も私の研究室においてあるんですが、あれも考えて見ると先生のお人柄がよくあらわれているように思いますね。私心

のない……、という名前のついた置物、教訓めいてもいるようですが、何かあの先生を思わせる感じです。そんなこともあって、なおいろんなことを相談したりできるんだと思います。

野﨑　大きい声といえば、今日のように『社会学雑誌』の座談会を開いたあと、学生に手分けして録音テープを文章化してもらうんです。それで学生が自宅でテープを聞きながら文章に起こしているわけですね。ところがある学生のお母さんがそのテープのなかの長谷川先生の声だけを覚えてしまって、耳から離れなくなってしまったという話がありました。きっぱりとした語り口のうまさのために、別に聞くつもりがなくてもついつい聞こえてしまうんだと思います。

司会　長谷川先生は、七五年にタイ、イギリス、フランスへ文部省在外研究員として三カ月ほど海外研修なさったことがあります。バンコクでは、タイの見聞よりも、マンハイムの翻訳でお忙しかったようですが。僕はたまたまバンコクでお会いして、サイアム・インターコンチネンタルという大きな一流ホテルにコーヒーを飲みにご一緒したんです。この間、久しぶりにそのホテルへコーヒーを飲みに行って思い出したんですけども、とにかくあたりかまわず、翻訳中のマンハイムの話に夢中になって、大きな声でしゃべられるんですね。日本語のできるインド人が「オオキナコエデスネー」と言ってそばを通りすぎて行きました（笑）。

四　教育熱心の先生

竹内　先生は生き方や学問の態度について、準拠枠をいくつか作っていらっしゃると思うんですね。私が大学院生や助手のころ、明治元年生まれの先生のおじいさんの話を聞いたんですが、このおじいさんの生き方は長谷川先生にとって、学問以前の人間の生き方として、大きな準拠枠であったと思います。大学生になられてからは、堀先生、あるいは杉之原先生が一つの大きな準拠枠になった。早稲田の大学院に進まれてからは武田先生の生き方が準拠枠だったと思うんですね。

　私は、長谷川先生の研究が理論社会学から家・同族研究へ変わるちょうどそのとき、大学院でご指導いただいたんですけれども、喫茶店へ入ると、短くても二時間、長いときは三、四時間いましたね。そのときの話にはそういう先生方の名前が何回も出てきました。ですから、優れた方の

生き方を自分のなかにとりこんで、自分を近づけるという内面的な努力を常にされていらっしゃったと思うんですね。

私は七二年に修士課程に入ったんですが、ちょうどその前年あたりから関西学院大学の余田先生といっしょに、家・同族研究をされてました。

長谷川先生と個人的に最初にお話したのは、入学試験の発表を見ていたときに、たまたまうしろから声をかけられ、社会調査室に来ないかと言われたときです。面接試験のときに希望したテーマについては、「あんなん難しいから、すぐにはできるテーマと違う。それより農村社会学のほうをやらんか」と言われました。たまたまご自身が同族研究を始められたときでした。私も確固たるテーマでもなかったので、やらせてもらうことになりました。でもその当時の神戸大学では、家と同族研究のことは全くわかりませんでしたので、専門家の余田先生のところにお伺いして、授業を聞かせてもらいました。また、古文書を読まなければならなかったので、日本史の高尾先生のところに古文書の解読を習いにお伺いしました。全く「いろは」の「い」から始めたわけです。

もちろん先生ご自身もはじめての分野で、かなりの方向転換だったと思います。でも、四〇代そこそこくらいで疲れを知らず、非常にタフでした。口ではよく「しんどい」を連発されますが、言うことで疲れを発散されてたと思います。

さらに、国立大学の先生方はとかく教育よりも研究を優先する傾向がありますけれども、ご自分の研究でとどめず、同時に教育にも生かされていたと思います。七二年あたりから文部省科研費をもらって長野県の上田・小県、佐久地方へ調査に行き、教室の学生をおおぜい連れていって現場を見させ、調査したことを卒論に書かせる、という形で研究と教育とを統合してゆくやり方でした。われわれ教員としては非常に難しいことだと思うんですが、それをいろいろな形でやってこられました。言い方はよくないですけども、もし理論社会学だけでいらっしゃったら、多分そうはならなかったという気もします。もちろん家・同族研究でも理論を重視されるのですけれども、それをふまえて実証研究に進まれた。実証と理論を融合させ、研究を教育の場に還元して学生を育てる、というふうなやり方を神戸大学の社会学研究室に定着されたと思います。

大野　ちょうど竹内さんが大学院に入ったころは、文学部に大学院ができて間もないころですね。それまでは学部学生だけでしたが、これからは研究者を養成していくことが

大野

要求された。旧帝大に比べますと、予算的にもスタッフ的にもどうしても落差があります。しかし、そのハンディを乗り越えて一流の研究者を育てていくという意気込みがあったと思うんです。それで竹内さんの世代から、ゼミで研究者を養成していく方向になったんじゃないかと思います。僕が学部で長谷川先生にお会いしたころは、まだ大学院がありませんでした。先生とは学部生の一九歳か二〇歳くらいで接触したんですけども、まだ授業はもっておられず、むしろ厳しい兄貴という感じで、僕もいろいろお世話になりました。

ただ、皆さんの話を聞いて本当に反省しているんですが、僕もいまそういう立場なのに、長谷川先生の教育に対する情熱、これには本当にかなわないですね。そのすさまじさはすでに助手の時代からありました。でも、「私はお前を教育してやる」という態度じゃないんです。

たとえば、若いころですから魂や思想の悩みがあって、それを先生に相談したら、青二才の議論とせせら笑うんじゃなくて、真っ向から受けとめるんですよ。一〇歳くらいの年の差があるのにですよ。まじめに考える連中にはまじめに対してくれました。人間として一番当たり前のことで、一番やらなくちゃいけないことをいまだに実践されています。今でも一九歳くらいの学生と実にまじめに議論しておられます。それは、むしろわれわれが見習わなければいけないところだと思います。僕たちの年になると行政的に忙しくて大変なんですけども、もっと努力しなければいけないな、というのが正直なところです。

野﨑　かなり長いあいだ大学院のゼミに通ったんですけれども、長谷川先生は大学院生も学部生も含めた自主的な研究会もやっておられました。学部生と院生を並べられますと、院生の立場はしんどいんですね。学部生はものを知らなくて当然ですが、院生は当然これくらいのことは知っているだろうといわれますから、院生だけのゼミよりもむしろしんどかった。使用したテキストは水林彪氏の『封建制の再編と日本的社会の確立』です。そこでは竹内先生と一緒に集められた本間村の資料のコピーを広げて、その解釈をして、そこから日本の家と村の構造を考えていくという、学部生にとってはかなり高度なレベルのこともなさいました。日本社会とか家とかで卒論を書こうとしている学部生を引きこんでおられましたね。

趙　さきほど大野先生がおっしゃったとおり、私も、長谷川先生は教育のために一生を賭けられたような印象を受け

ました。中国では大学の先生の仕事はすごく楽なんですよ。たとえばプリントは一回書いたら何年でも使います。でも長谷川先生は、毎年自分で一文字一文字書かれます。去年のを今年使うという事はありません。本当に真面目ですばらしい先生だと思います。そういう事をしなければ、時間ができて自分の研究とか調査がよくできるのに、学生を育てるために、自分の一生を賭けた感じ、私はそう思います。

五　女子学生の扱いが苦手な先生

西川　高井さんの話を聞いてたら、ものすごい差別だと、私は思ってしまいます。私たちのときはそんなに厳しく仕込んでくれなかった様な気がします。私の進学の意志がはっきりしてなかったから、とも思うんですけど。

長谷川先生を端的に表現したら、二言で言えると思います。一つは、いまも出ているように、世話好きで、教育熱心なことであり、もう一つはかんしゃく持ちだということです。そのかんしゃくは、私も何回か落とされましたが、それは男女の区別ないように思います。そういう意味では先生はリベラリストというか、フェミニストというか、理性では、男と女を差別してはいけないという建て前があると思います。しかしその一方で、高井さん、竹内さん、材木さん、藤井さんなど、男はよくしばきはったけど、女性には特別の距離があったように思うんですね。そこが物足りなかったとこなんですよ。

堀先生はオールド・リベラリストで、「女は育てなあかん」という姿勢だったんですけど、長谷川先生はどうだったのかな。男が茶碗を洗えるか、というふうに「男の沽券」にこだわっておられるようにも思いました。私は、神戸大学では学部学生として接しただけで、四〇幾つの頃の長谷川先生の女性観しか知りませんので、皆さんからみた長谷川先生の女性観を聞きたいです。

藤田　西川さんとは一〇年違いますから、わたしが学生のときは先生は三〇代ですよね。おずおずと女性を観察していたように思いますよ。

大野　まだあの時は、先生は独身でしたね。

藤田　独身でしたしね。私が真っ赤なマニキュアして行くと、「ほう、きれいですな」となかなか興味津々でした。先生は助手でしたので授業は知りません。私たちの授業が終わったら、「先生帰りましょう」といって、なにか食べたり飲んだりするための財布代わりになっていただきました。

西川　私がミニスカートをはいて行くと、興味を示されることはあったと思います。教師として怒っていただいた経験はあるんだけど、男と女では怒り方がちょっと違うようにも思いましたね。それが悪いというんじゃないのですが。

岩谷　理屈として男女平等というのはわかっておられるんですけどね。さきほどどなたか言われたように、おじいさんが明治元年生まれという、家父長的な雰囲気の中で育っておられると思います。僕は、先生とお父さんとの会話を一度聞いた事があるんだけど、非常に父親との絆が強いんですね。だから、生活態度の中ではどうしても女性に対して理屈とは違う対応をされたんじゃないのかと思うんです。そのあたりが女子学生にとって、なんとなく納得いかない部分で、それが自然に出てしまったんじゃないでしょうか。

藤田　でもなぜ先生に叱られなかったのか、私にはわからない。

西川　それは教師になってはじめてわかったんですけど、やっぱり女はしばき甲斐がないの。悪いけど、私を含めて、育てたわ、結婚してしまうわ、という先入観が先生にはあったのかな、と思います。

竹内　それは違うんじゃないかなという気もしますけどね。僕が助手の頃も、たとえばお茶のいれ方一つまでうるさかった。どういう方向に茶托を置いて、お茶をこういうふうに置いて、お茶はどういうふうにいれたらいいか、と。それはそれで知らなかったから役に立ったんですけど、人との接し方や生活の面まで非常に細かくおっしゃるんですよね。

　たしかに家では先生は茶碗を洗ってないと思うのですが、そういう側面では公と私の場を区別していたと思います。さっきの大野先生の発言に関連しますが、学生を育てる事では段階があったと思うんですね。西川さんが入られた頃はまだ修士課程だけで博士課程がなくて、研究者養成が厳しかった頃だと思います。いきおい入学者を絞らざるをえなかった。

西川　神戸大学社会学から研究職に進んだ女性は確率的に少ないですね。

竹内　ですけどね、北海道教育大学におられる大津さんのように、女性でもかなり評価されてましたからね。女性の研究能力もちゃんと評価していらっしゃったと思うんですけど。

野﨑　女性の研究者をこの研究室から育てなくてはならないと言われたこともあります。

西川　私が知らないだけかもしれませんが、卒業生として

は、女性研究者養成は手がかかるかもしれんけども、一・五倍くらいの熱情を持ってしばいてほしかったと思います。

竹内　長谷川先生を弁護する意味で、西川さんの発言についてちょっと補足します。女の子の指導が淡泊だって話が出たけれども、あれは本当は感情移入をしたいんだけれど、押えているというという態度じゃないかなぁと思うんですけれど。

西川　私は基本的に、長谷川先生、好きですよ。だから、何といわれようと構わないけれども、女の子に対してはやっぱり遠慮があるんです。育ちがいいというか、客観的というか。ただやっぱり遠慮してたら、育たない。男の人にだったら、「このアホ」って何度も言われてると思うから。

竹内　ただね、ある段階で職をやめていって、続けない人が多いですよね。文学部ですから、社会学でも女の子の比率が高く、そのぶん、一般的な見方からすると、マイナスの評価になる。男については簡単だけれども、女の子が多い文学部で、女の子を社会的にどう育てるかというのは、神戸だけの問題じゃなくて、全国的な問題で、まだ解決しにくいのではないかと思います。

西川　本音言ったら、男と女が両方いたら、私でも男をしばくから、それはよくわかるんですよ。でも、長谷川先生は女性に対してある距離があったんじゃないかな。先生との世代的な差もあって、そこが残念に思うことの一つです。堀先生にも甘やかされましたが、堀先生との距離はすごく安定していたんだけど、長谷川先生との距離はちょっと不安定だったんです。先生の生き方として、女の人はあまり視野に入ってないんじゃないかという気もするのです。

岩谷　やっぱり旧制中学の卒業でね、大学にもほとんど女子学生がいない段階だから、女性に対するつきあいかたは不得手ですよね。

司会　卒論の口頭試問で女の子を泣かせなくなったのは、最近じゃないでしょうか。一説によると、長谷川先生は娘さんが大学生になられてから、急に優しくなったということですが。

藤田　私らのときなんか誰か必ず泣いてたよ。長谷川先生だけじゃなくても、他の先生に怒られてみんな泣いて来るから、卒論の口頭試問ってなんじゃって思ったことあったけどね。女の人って、わりに泣くんじゃないの。

野﨑　このごろは女性が図太くなったのであまり泣かないようですけど。

茶円　私自身はそんなに厳しく怒られた記憶がないんです。この間お会いしたときに、先生に「めったに教師、やめん

ほうがよろしいよ」といわれました。それも、女性が仕事を続けていくべきだからとかいうんじゃなく、老後の年金のことを考えると、やめんほうがよろしいのだそうです。

六　先生の家意識

奥村　先生は、神戸大学が京大や阪大より後発なので、大学院の修士課程、そして博士課程の設立に努力された。大学院ができてからは、卒業生の研究者としての就職をどう開拓していくか、非常に苦心されていたのではないかと思います。女性研究者のことはそのあたりのこととも関係があるんじゃないかと思います。

ところで、私が結婚したその翌年でしたか、お手紙に「夫権の確立は出来ましたか」と書いてあるわけです。そういう言葉を見たのは、そのお手紙がはじめてなんです。西川さんがおっしゃりたいことと通じる所があるのかも知れないですね。結構便利な言葉ですから、その後、私もときどき使ってはいますけれど。

大野　確かにそういう家意識というのは最近ももらされますね。さきほどから話に出てますように、堀先生から、金澤先生や杉之原先生を介して、この研究室という家を引き継いだという意識ですね。「家の長」として引き継いだという責任感がありまして、神戸大学の社会学研究室に対するコミットメントがものすごく強い。だからそのためには学生を育て、あらゆる厳しい事もやる。

司会　家といえば、「家風」も引き継がなければいけないと強く意識しておられる。特にこの四、五年ですかね。

「家風」、つまりオーソドックスな学風のモデルは堀先生たちが作った社会学研究室だと思うんです。それを絶対につぶしてはいけない、栄えさせなきゃいかん、そういう考え方は年とともに強まったような気がします。ですから、先生は、近代人でありながら、そうでもない。少なくとも杉之原先生的な近代人とは違いますよね。

藤田　長谷川家の家系を探ると、四五〇年くらいまで先祖が遡れるそうですが、それだけ続いた末裔に自分が生まれてきたという意識があると思います。

七　マスコミ嫌いの先生

岩谷　授業で徹底的にやられたというのを聞くと、僕はある意味で幸せやったなと思うんですよね。僕みたいなシャイな人間は登校拒否になってしまっていたかも知れません

ね。確かに日常話していると厳しいというのはわかるんですね。だから逆にそれに耐えられる神戸大学の後輩はすごい。逆に僕たちの回生は、スキーに行ったり、麻雀をしたり、旅行もしたり、結構遊んだんですよね。

大野　このあいだ六回生、七回生が集まったでしょう。僕はたまたま参加してびっくりしました。なんだか友達どうしみたいでしたね。僕らの頃とはちょっと違いますね。

岩谷　まだ助手という気安さがあったんじゃないかな。教授とか助教授になると遠慮もあったと思うけど。夜遅くまでつきあってもらって家に帰らんと泊まったということもあるんですよ。

今村　たいがい徹夜で話した。僕らに対しては学問上の直接の接点はなかった気がしますが。

岩谷　ただ卒論は正直言ってどの先生にも指導してもらえず自己流でやりました。面接のとき先生たちは横向いてしまって、杉之原先生だけが二、三回質問されただけでした。落とされたかなとがっくりしていたら、長谷川先生が後で「いい点もろうてたで」と言ってくれて、こちらの心理を先読みしてよくフォローしてくれました。

今村　ところで、ずいぶん前ですが、テレビに出ないかとお誘いしたら、にべもなく断られました。マスコミ嫌いな所があったんでしょうか。

岩谷　今まで先生は多弁だといわれてきましたが、サンテレビの同和問題の座談会番組では、一回喋ったかどうかでした。この先生にこんなときがあるのかと思ったぐらい沈黙を守っていらした。やっぱり嫌いなんじゃないかな。

今村　テレビで概念規定するのは大変だったのかな。うかつなことは喋れない、そういう気構えがあったのかな。

よく大学の先生がテレビに出るけども、社会学の先生はあまり出ない気がします。寂しい感じです。学科を経営するには、研究だけではなく、世の中の動きも大事です。マスコミも、これからは新聞、テレビ、編集だけじゃなく、広告代理店も含めて、社会を一つにコーディネートしていくいろんな分野が出てきているわけですね。だから、学科経営の中でも外に目を向け、世の中がどう動いているか取り入れてもらいたいですね。ところが長谷川先生は非常にオーソドックスでね。新聞の投稿原稿を見てもおそろしく緻密でね。あれじゃしんどいな。もっと気軽に、軽妙に書いたらいいのに。

八　先生の教育方針
――研究者養成と実社会教育とのあいだ

西川　大学の役割は研究者を養成するだけではなくて、社会に役にたつ人を教育することですから、神戸大学の社会学も世の中に役にたつ人間を作っていることをもっと宣伝して欲しいのですよ。なにも学閥をつくる必要はないけれど、それなりの就職活動というのはして欲しいのです。そういうことが最終的にはフィードバックして、神戸大学に社会学専攻あり、というようになるわけよね。

私の同世代には電通、博報堂、大広などの広告代理店をはじめ、メーカーにもいっぱい先輩がいるのですよ。せっかくコネ持っていながらちょっと残念です。

神戸大学の社会学を卒業して一番残念だったのは、文学部なんて就職考えるな、という雰囲気でした。それは、私は違うと思います。竹内さんのいる立命館大学などは産・官・学の結びつきに積極的に乗り出しているのですけど、学問が直接社会へはね返らないといけませんね。また大学の先生も政治、行政にかかわらないとだめなんですよ。就職活動は非常に世俗的なことかもしれませんけれども、もっと活発にやって生き生きとした神戸大学の社会学専攻をつくってほしい。

うちの酒場はキタの新地ですので、大企業のわりと偉い方がおみえになりますが、神戸大学出身であるとあまり聞きません。私は大学院は大阪市立大学ですが、こちらのほうが学部にかかわりなく活発です。そういう「役にたつ」大学教育を、長谷川先生がご退官のあと、後継者の方々に切にお願いしたいと思います。

野﨑　社会学研究室のステータスやその運営についての長谷川先生の考え方の基本は「国際化」ですね。先生は国際化を非常に意識しておられると感じます。国際化のなかで大学がやるべき一番大事なことは、世界に通用する学問をつくることであり、それを抜きにして国際化はないんだといつも強調しておられます。留学生の指導をとりわけ厳しくされるのはそのためだと思います。アメリカに留学して母国に帰った人間と、神戸大学に留学して帰国した人間とで、歴然たる能力の差があってはならないという国際的視点がはっきりしています。

西川　それはそれでいいんですよ。ただ、現役のバリバリ働いている卒業生を集めて、今年の学生はこういう卒論を書く人がいて、人材を見てもらいたいとかね。売りこむ機

会をつくるだけでも、違うんですよ。

今村　そこまで先走らなくてもいいのじゃないかな。研究のコアは非常にしっかりしたものがあり、それと格闘してるのは結構で、またありがたいことだと思う。でも社会との接点をどうするかということですね。世の中の情報に対して無欲というのか、なりゆきにまかせすぎる。社会学専攻の学生として、何も情報を持っていないのは、研究室の雰囲気の問題であろうと思うんですよ。西川さんの言うようなことも、そういう意味では学生の活性化につながるのではないですか。むりやり自分の進路を狭くすることはないんでね。僕も神戸大学を出て三十数年ですが、神戸大学の卒業生のなかでつきあっているのは全部他学部出身の人です。社会学も卒業生はいっぱいいるのですから、ときどき親睦会でも開いて卒業生との接点を作ったらと思います。今の三、四〇代の、社会で活躍している人たちは、ものすごい情報量をもってますよ。そういう人たちも教室に来てもらうのが良いと思いますよ。

奥村　実際問題として就職の世話までは難しいでしょう。私学では就職部、進路部などを設けて、それにかかわる教官を配置しているけれども、そうでない場合は、学生の就職指導はちょっと難しいでしょうね。本当は必要なんでしょうけれど。

今村　別にマスコミだけとはいいませんが、文化的な職業についての情報環境が整っていないと思います。いろんな分野の先輩との交流をしていくのも一案だと思いますが。今の世の中はすごく変わっているんです。なにも就職の世話までしろとは言わないが、どういう分野にトライできるのかという情報が必要だと思います。さきほど、フレーム・オブ・リファレンス（準拠枠）という言葉が出たけれども、やっぱり社会学を勉強したことを世の中でどう使えるのか知ってほしいなあ。今や一流企業でも経済学部を卒業してなくちゃいけないことはないんだから。

岩谷　長谷川先生の教育者としての熱意は見事ですが、研究者を育てることに、ややウエイトがあった関係上、就職についてはわれわれが期待した通りではなかったという気がします。だから今後そういう方向に研究室が変わっていってほしいという気はありますね。

九　大学改革と先生の御努力

大野　学部の修士課程の入試は従来は年一回しかなかったんですが、今年から年二回になります。その一つの理由は、

文部省の方針で、修士課程の学生数を欧米並にするということです。ということは、一回社会に出て就職されて、いろいろな分野で活躍された方も大学院へ戻ってくるようになるわけです。国立大学も門戸を開きつつありますので、たとえば今村さんにマスターに入ってもらうのはどうかなと。

今村　マスターへは行きたいですなあ。

大野　さらに、そこでわれわれにいろいろ教えていただければ、「ああ、そうか」とわれわれも思うでしょうね。そういう交流は可能ではないかと思うんですね。それからもう一つ、学生諸君がマスターに入っても、全員が研究者になる必要はないと思うんですよ。これからどんどんマスコミや外の分野にいき、相互交流も増えると思います。最近国立大学もそういう制度改革を考えざるをえない状況です。

岩谷　長谷川先生は三十八年間、神戸大学におられて、大学のいろいろな改革にほとんどたずさわってこられたんですね。僕らが卒業するときは、まだ文学研究科（修士課程）も、文化学研究科（博士課程）もなかった。実は僕が卒業するときにやっと文学専攻科ができまして、一年間在籍したことがあるんです。

司会　文化学研究科（博士課程）ができたときは、清水先生、杉之原先生が文学部長のころでしたが、研究科創設委員をしておられた長谷川先生は、講座編成案の作成とかを補佐しておられたと思います。ですから、あの講座編成ひとつをとっても、長谷川先生の学問観がかなり反映されているようにも思います。

大野　今村さんが、京都大学卒業生に割合マスコミ関係者が多いとおっしゃいましたが、それは文化的雰囲気の問題だと思うんです。これは文学部だけじゃなくて、神戸大学が全体的に抱えている文化的雰囲気ですよ。東大よりもむしろ京大のほうが独特の文化的エートスがあると思うんです。そういうものは時間がかかれば出てくるんじゃないかとも思うんです。神戸大学は非常に大変なんです。旧帝大が七つありますが、八つめの（新制）大学なんです。ぼんやりしていると差をつけられてしまうので、常に七つめとの溝を埋めないといけません。すると、とにかく改革、改革です。これからは旧帝大では大学院大学化が進みますが、われわれも乗り遅れてはならないんです。それがこの大学の基本方針ですから。特に長谷川先生は大学行政上の職務に就いておられたので、そのあたりのことがおわかりなのです。

司会　大学院での研究者養成が最重要事である。そういう

国立大の伝統的方針を長谷川先生は堀先生から受け継いだように思います。私立大学は、学生の関心に答えて学問内容も変えていこうとしています。一方の国立大は、正統的な学問体系を崩せないので、就職にはなかなか直結しないような教科編成になってしまうのだと思います。

一〇　定年知らずの学問的前進

今村　僕は長谷川先生と、最近は色濃くつきあってないからわからないけれど、非常にさわやかですね。

池田　いまのお年にしたら、若いですよ。昔、われわれがおつきあいしていたときとほとんど変わらないイメージですね。

野崎　長谷川先生は、六〇歳をすぎても学問的に進展をみせる人なんですね。先生はいまでも貪欲にいろんなものを吸収していらっしゃいます。近代化あるいは近代社会の形成が国際関係とどのように関連しながら展開していくのか、それを社会的伝統やさまざまな位相において分析していく、こういう作業をずっとつづけておられます。アメリカ社会学の研究とここ二〇年ほどの家・同族・村の研究とが、日本社会の近代化や日本的社会構造の分析に収斂して、ひとつの長谷川理論として展開していく。還暦は迎えたけれども、学者として《隠居》せずに、いまも第一線の先端部分で仕事をしておられるところこそ、われわれの学ぶべきところじゃないかと思います。

最近お書きになったもののなかに、自分は「近世日本史家としてはいわば門外漢で」あるというくだりがありました。あれだけ緻密な考証をして、文書にも研究史にも通じていて、なおかつ近世史にかんしては門外漢であるとおっしゃる。非常に謙虚な態度で、社会学以外の学問分野からも有益な成果を貪欲に取りいれて、自分自身の理論を膨らませていくところがやはり印象深いところです。

『社会学雑誌』の会員向けの「研究会ニュース」のなかで、先生は、退官したら「世捨人」にでもなりたい、それが自分の性にあっている気がすると書いておられます。私はこれを読んで意外だと思ったのですが、その後、先生からお電話があって、ある仕事を一緒にやろうという熱烈なお誘いがありましたので、今度はなんという精力的な「世捨人」だろうと感じ入りました。

岩谷　学問の話をしたら、いつも思うんですよね。先生は非常にタフなんですよね。あれだけ全力投球なさって、疲れを知らないのかなあ。いつ息抜きしてるのかなあ。その

精神的、肉体的スタミナには本当に驚きますね。ますますお元気でご活躍されると思いますね。

司会　先生は、ちかぢか、ご高著『日本社会と家』を出版されます。家と同族のライフワーク、「長谷川理論」を実証的裏付けのもとに展開された著書です。実は先生のこのご本は二年前、学部長になられる前に出版の予定でした。ところが謙虚な先生は、明治維新について、最新の研究動向をふまえてもっと勉強しないと正確に書けないとおっしゃったまま学部長となられ、二年間作業を中断されました。先生の単著のご出版が早からんことを祈ります。また、平成六年三月には兵庫部落問題研究所から、先生の過去の論文を集成した単著『部落問題と市民啓発』が出版されるはこびとなっております。なお、先生のご退官に際しましては、われわれ同僚、直弟子の教師たちでご退官記念論文集をつくり、ご退官にあわせて刊行する予定です。時間がぼつぼつ参りました。本日は、長い時間どうもありがとうございました。

〈付記〉

この座談会の設営、録音、テープ起こし等の作業には文学部四回生の大原径子、小林研一、宮井孝敏、三回生の青戸康広、篠原縫、竹中篤子、田代卓、林亜希子、藤田幸子、松田順子、森下知子、吉川貴志、渡部淳の各君の協力を得ました。記して感謝いたします。